

「具体⇄抽象」PJ 報告⑧自己啓発のポイント

企業経営漫談士 岡野実空

今回のプロジェクトが検討を重ねてきた、「具体⇄抽象」能力の組織的開発の要素や要件などを、ここまで7回にわたり報告してきました。そのまとめの前に今回は、それらすべての基礎となる「読む」「聞く/話す」「書く」能力の自己開発について、我が国の達人たちから助言をいただきます。

その1: 「読む」=読解力

今春亡くなった「知の巨人」、立花隆氏。『ぼくはこんな本を読んできた』を始め、氏の読書録は何冊か出版されていますが、3万冊超という量以上に驚くのは、それらの領域の広さ。また氏の言う理由は、「読まなければ書けない」という実にジャーナリストらしいものでした。

また私たちが注目すべきなのは、それに続く「まず消費者にならないと、ちゃんとした生産者にはなれない」という言葉。それは書くこと自体が職業ではなく、情報伝達の手段である組織人にとっても、実に身につまされる言葉です。まして「知識社会」に入り、特にその「質」の高さが問われるいま、その言葉は、「優れた読者にならないと、良い筆者にはなれない」と読み解く必要があります。

その上 AI の登場で、さらなる高さを求められれば、その裾野はますます広くならざるをえません。

その2: 「聞く/話す」=対話力

次の「対話」に関する助言は、脚本家・演出家の平田オリザ氏から。その『わかりあえないことから』(講談社現代新書)は、副題にある「コミュニケーション能力とは何か」を考える必読図書です。

前回コラムでも書いたように、いま我が国はあらゆる面で格差社会に向かっています。従って多くの対話や議論において、「一億総〇〇」などの同調圧力につながりかねない考えは、多様な価値観の一つとして控えめに発言しなければなりません。

また議論の始点となる「問題設定」にじっくり時間をかけ、通常は無意識の領域にある「前提条件」や「仮定」などを全員から表出させ、容易に『わかりあえないことから』コミュニケーションを始めなければならぬのです。

そしてそれらをつなぐのは「共感」。それはこれまで何度か指摘したように、「同意せずとも理解することにより、「同調圧力」を中和して、お互いに「わかりあう」領域を劇的に広げてくれるのです。

『三々な経営』

0-31 明日への遺言③コミュニケーション

3-4 企業人の「三多」

3-17「イノベーション」の壁④総集編

『続・三々な経営』

Z-16~20 私の推薦図書①~⑤

その3: 「書く」=執筆力

さて3番目の助言者は、作家の故井上ひさし氏。今プロジェクトに絡み、再読して何度も膝を打った一冊は、氏の『日本語教室』(新潮新書)でした。それは「読み取りやすい」小説や随筆の「書き方」に止まらず、演劇でお客が「聞き取りやすい」言葉の選び方にも及び、日本語を使ったコミュニケーション全体の優れた指南書となっています。また今プロジェクトも採用した、氏の有名な創作コンセプトの「具体⇄抽象」事例集でもありました。

それは「むずかしいことを、やさしく。やさしいことを、ふかく。ふかいことを、おもしろく。おもしろいことを、まじめに。まじめなことを、ゆかいに。ゆかいなことを、あくまでもゆかいに」です。

最後に、「具体⇄抽象」能力とキャリアとの関係を考えるには、「知の巨人」の回顧録、『知の旅は終わらない』(文春新書)が最適。そこには、私たちが「知識社会」で生き残るためのヒントが満載です。因みにその始点は、「人間はすべて実体験というものが先なんです。これは何だろうという驚きがまずあって、それを理解したいから、本を読んだり考えたりするんです。」そして氏のマイルストーンは、本に書き社会に問うこと。また私たちは組織をつうじ、モノやサービスで市場と対話をするのです。

次回の報告は、今回のプロジェクトそのものを振り返り、その後の最終回は、MCN 活動の10年を含めた総括を掲載します。

2021年11月22日 実空